

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 八重樫 勝



これからの学校における

リーダーの在り方

岩手県小学校長会 会長 佐藤 淳

(盛岡市立仁王小学校長)

近年、「心理的安全性」という言葉が使われるようになってきた。

この言葉の意味としては、「どのような言動も他者から否定されず安心して発信できる心理状態」とされている。中教審答申『『令和の日本型教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について』においても、「学校管理職のリーダーシップの下、心理的安全性の確保、教職員の多様性を配慮したマネジメント」の重要性が述べられているが、この概念の重要性が最初に指摘されたのは、民間企業においてである。その背景には、より高い生産性を上げるためには、自由に発言し周囲から認められる心理的安全性の高い集団をつくるのが最も重要であるという分析結果がある。また、そうした取組を行う企業は、個人の業績を評価する人事評価システムを廃止する傾向にあると

もに、その企業の管理職は、チームメンバーに対して、業務管理をするのではなく、どのようにすれば更により生産性を上げることができるか、相手の話を聞き、共に考える役割が重視されている。

では、学校現場を振り返った時、「心理的安全性」はどうであろうか。

そもそも、学校では、様々な年代の教職員が、担任を始めとする各分掌を責任をもって担当するとともに、率直に意見交換しながら、教職員としての専門性を高めてきた。そこには、相手を尊重し、子どものための教育をより良くしていくための目的意識が共有される心理的安全性が機能しており、その重要性は今も昔も不変である。しかし、近年、教員の時間外勤務の増加等に伴い、教職員の心理的安全性が確保しにくい状況が見られる。折しも、令和5年6月に公

表された国の教育振興基本計画では、子どもたちのウェルビーイング（善いあり方）を高めるためには、教師のウェルビーイングを確保することが必要であると明記された。

今、まさに校長を始め管理職は教職員一人ひとりのウェルビーイングを高めるため、一人ひとりの教職員が尊重され、自由に意見を述べ合い、子どもたちのために生き生きと仕事に打ち込める学校組織をつくることが求められている。その際、人的配置の拡充が必要なのは言うまでもないが、校長としても、今できることに積極的に取り組む必要がある。働き方改革を進めることはもちろん、「P（パフォーマンス）×A（能力）×S（サポート）×M（モチベーション）」という公式が示すとおり、教職員一人ひとりへの支援と意欲喚起は欠かせない。

その意味でも、これからのリーダーは、「指導・管理から支援・信頼へのシフト」が求められている。これからの新しい教育の始まりに向け、管理職も新たな姿を求め、ウェルビーイングを具現化する学校を創り上げたい。

創立40周年
記念講演会

KCアカデミー代表 近藤 義男

「人を生かし、育てるマネジメントへの一考察」
―教員として、野球指導者として、親として

はじめに

近藤です。よろしくお願ひします。これは東京オリンピックの金メダルですけど、息子の健介から預かっています。今日は、途中で、ぜひ皆さんにも持っていたくださいと思っていますので、楽しみにしてください。WBCの金メダルも持ってきていますので、それをご紹介しますと思います。

最初に自己紹介をします。基本的には公立中学校で数学を教えていました。管理職としては7年しかやっていないです。教頭4年・校長3年です。27歳から3年間パキスタンのカラチ日本人学校に行っていました。千葉大学の大学院にも47歳から3年間行きました。



これらはすごく大きな経験でした。野球部の顧問をやっていたところ、中体連を手伝ってくれない

かということいろいろな機会ができて岩手の方々ともお付き合いができ、U15の侍ジャパンの軟式の方の編成委員長をやった8年目になります。親としては、長男が千葉市の中学校の英語の教員をやっています。次男は、福岡ソフトバンクに移籍し野球をしている近藤健介です。こんな経歴の中で今日のお話をしたいと思います。

ワークアズライフ

最初に「ワークアズライフ」ということについてご説明します。これは筑波大学の落合陽一先生が述べておられることで、仕事とプライベートを分けるのではなく、一緒に考えて、それを全部含めるような生活・生き方をした方が今の時代には合うのではないかと言っています。若い落合先生が言っている考え方を私は好きで、自分も仕事を楽しくする、仕事とプライベートを分けるのではなく、両方含めて楽しんでいく、その楽しいということでは人が育つて、やりがいを感じる。先生たちが育つということ、それが子どもたちのためになると思って管理者としてもやっていました。

経験と出会い

次に、自分の育ちがどうだったかということ皆さんにご紹介したいと思います。まず、日本人学校に3年間行きましたが、今振り返れば、色々な経験をしました。使用人が7人いて、彼等とのやり取りや生活の中で、イスラム文化にすごく触れることができました。あるとき、うちの使用人が亡くなり、雇用主だから鳥葬に参列してくれと言われて鎮魂の丘に白い布で巻かれた遺体を持っていつて切り刻んで、ハゲタカにその肉を持っていつてもらうというものでした。そういうことから世界観が随分変わりました。当時、旅行でヨーロッパに行き西ベルリンにも行きましたが、その1か月後にベルリンの壁が崩れました。また、ソビエトがアフガニスタンに侵攻していたので私がパキスタンにいた間は外出禁止令が出されていました。良い経験ができた3年間だったと思っています。

大学院にも行きました。学校改善というところで大学院に行きましたが、教育財政学にすごく興味を持って先生の授業を受講し、

大学院から戻った後に市教研の学校事務部会に教員では一人だけ入りました。お金をうまく使うことで学校改善ができると思いました。次に、野球についてですが、学校の部活動は中体連ということになり、夏の大会・秋の大会などやれることに限界があります。何とかしてもっといろんなことをやりたいと思って、千葉県中学生野球連盟という選抜チームをつくったり、いろんなことをやる組織をつくったりしました。実はそのときの経験が管理者になったときも役に立ちました。

4人の恩師について紹介させていただきます。太田さんは野球の大人です。彼は「ピンチはチャンス」といつも言っていて「普通はピンチと思うだろう。でも、これはチャンスなんだよ。ピンチと思うから、それで終わっちゃうんだよ。それはチャンスなんだよ」と僕は言われて、いろんなことを考えてやっていました。

渡辺先生はソニー財団の事務局長を長くやっていた人ですが、千葉の理科教育の中心で文部科学省の賞を何回取ったかわからないくらいの人です。理科の自由研究もやっている人で、方法は無限だということを教わりました。

青木先生は千葉市で校長をやっていて、3年残して辞めて、信州大学の助教になった人です。僕に大学院に行くのも勧めてくれたし、研究をする楽しさを教えてく

れたのがこの青木先生です。

シダックスの志太さんは、大企業の創業者ですが、中学野球の大会後援者で、青少年の教育に関わる考えを教わりました。東日本大震災があったときに、彼の母校の伊豆の菰山高校の大きな講堂の補修が必要になり、寄附を集めていたところ、志太さんは僕が講堂を作ってあげる。その代わり、僕に年3回高校生に講演させてくださいと言ったようです。次の世代の青少年・子どもたちに自分の思いや、これからの日本を語るということを教わりました。

私はこんなふうに着てきましたが、4月に数学を教えるときに何で数学をやるのということについては「数学を使って自分の課題解決能力を高める。それは他の教科もそうだよ。それによって自分の脳を鍛え、自分が良い判断をし、自分としてはこうするという対応策が出てくるよ。」と言っています。

「楽しい」「やりがい」

次に、仕事を楽しくやりたい、やりがいを持ってやりたいということについてですが、京セラの創業者でJALを立て直した稲森さんが、仕事の成果は能力×熱意×考え方という3つの掛け算だと言っています。この中で一番大事なのは考え方だと言うのです。能力も熱意も一々百ですが、考え方はマイナス百々百までであると言っています。今、スクールカウンセラーと行っていて教わったこと

は、前向きな言葉「ドンマイ、ドンマイ、何とかなるよ」「さあさあ、次、次」という言葉の持つパワーと、その反対、後ろ向きの言葉「あーあ」「嫌だな」「ちえっ」とかいう言葉の後に心は落ちるということでした。自分の考え方、思いを変えらるることによって、楽しくできるようなトレーニングを試してほしいです。

次に、校長としてどうやったかを説明します。私は「学校・地域の実情に合った学校づくり」ということを考えていました。それだけが独立性を持つて、学校とか地域の実情に合わせた学校をやっているのだよというふうになったのが均一化の終焉ではないかなと僕は理解しています。何とか学校の実情で、学校の先生たちにとっていい学校、ストレスがたまらない学校づくりをすることで、先生たちが育つのではないかなと考えています。

学校職員の育ちへの一考察

学校職員の育ちへの一考察というのですが、私が思っていることです。育ちをサポートするためには、やっぱり仕事を楽しくする、そのためにはストレスがない職場づくりをしなければと思います。できるだけ先生たちにいわれたことを含めて考え、働きやすいような状況をつくるということを意識してやってきました。

教頭のときにやっていたのは、電話は教頭が取る。事務職員が取

ると必ず担任に回してしまうので、回さなくていいときはほとんど僕が取って、教頭で終わります。これは校長のときも取っていました。

また、先生方のちよつとしたところを手伝い、「業間はいいよ。校長が外に出て見てるから」と言い、「そこまでやらなくていいよ」「そこまでしておこう」ということを職員会議や研修会で話しました。先生たちがストレスを少なくして働き、先生たちを楽しくする。それが子どもたちといい関係をつくり、子どもたちを育てているのではないかというのが、私の感覚、考え方でした。

親として

残りの時間で、近藤健介の育ちについて、ご紹介したいなと思います。子どもの頃はすごく外遊びが好きで、体を動かすのが好きでした。10歳までに神経系を伸ばすためにいろいろなスポーツをやっていました。



た。小学校3年生のときに「僕は全部のクラスに友達がいる」と言いました。人とコミュニケーションを取ることで得意でした。

中学校は修徳学園中に行きたいと言ったので、遠いので家族も引越しました。1年生は朝4時集合で、2時50分には家を出るため親が送りました。高校は横浜高校に入り、一人だけ中学校軟式野球の出身でしたが、後輩からは「近藤先輩が怖くて、近藤先輩の顔を見て野球やっていました」と言われるくらい必死で妥協しない高校生活を送っていたようです。プロ野球の日本ハムに入団し、2軍の試合を見にいったときに、彼は塁に出ると審判に「お願いします」と挨拶していました。「実力の世界って言われるけど、挨拶とか人付き合いできなかったら活躍できない」と言っていました。

育てるという意味においては、やっぱり楽しくどうやってやり続けるかだと思います。

全てではないですけども、考え方によってはピンチはチャンスにもなるし、どう考えるかがやっぱり大事というところにおいては、仕事を楽しくやる、それを私は特色ある学校だと思います。学校というのは結構裁量権があるのではないのでしょうか、自分たちで考えて自分たちがやりやすいようにするために管理者として考えていくことが、先生たちの楽しさ、やりがいというのを伸ばすのかなと考えています。

そういうことで、私の話を締めたいと思います。ご静聴ありがとうございました。



オンラインで研修中の三浦校長

第31回 学校心理カウンセラー研修講座

をいただいた。研修内容等について報告をお願いした。

岩手県支部では、東日本大震災で児童生徒の心のサポートが特に重要になった沿岸地区の5地区会（気仙、釜石、宮古、下北、九戸）を中心に、日本教育会が主催する「学校心理カウンセラー研修講座」に養護教諭を派遣して8年目になる。今回は下北地区から熊本市で行われた研修会にオンライン研修で2名の先生方に参加



カウンセリング機能や教育相談体制の充実

岩泉町立有芸小学校

校長 三浦 紀久果

3日間に渡る主な研修プログラムは、治療的カウンセリングのみならず、予防的カウンセリング、保護者に対する相談や助言に関する内容でした。

講演講師、石隈利紀氏による「学校心理学入門〜子どもと援助者と学校の援助〜」においては、一次的・二次的・三次的援助サービスの概念は、今般改訂された「生徒指導提要」の二軸三類四層の重層的支援構造と合致することが強調されました。これは、家近早苗氏の講義において触れられた児童生徒の課題を解決するための対処的・消極的アプローチとともに、特性を発見し、伸ばしていく働きかけによる予防的・開発的アプローチの側面をもって援助していくとの必要性とも重ねてとらえることができました。その中で、四つのサポート（①情緒的サポート・②評価的サポート・③道具的サポート・④情動的サポート）をバランスよく使うこと、保護者への相談や助言においても行動に着目し

た評価的サポートに留意することを確認しました。

研修講座の中では、「援助チームの作り方・進め方・活かし方」について、校種や立場が違う先生方とチームをつくり、オンラインで事例検討をし、援助チームシートの作成も行いました。



「怒り」の感情の大切さと心の健康

岩泉町立小川小学校

養護教諭 松川 晴香

どの講座も学びの多い研修となりました。特に「怒り」の感情の大切さと心の健康は、これからの児童生徒との関わりの中で大切にしたい考え方を得ることができました。講座の中では、怒り等の負の感情は、自分自身を危険から守る大切な感情であるということとを学びました。しかし、私たち大人は無意識に、「悪いもの、隠すべきもの」としている場合が多く、その「悪い」という考えが、子どもたちの心にも影響しているようでした。また、ICTの普及や目標や評価の数値化による「体験」の機会の減少なども影響

近年、不登校やいじめ等の問題が多発し、児童生徒が抱える悩みも複雑化・深刻化しています。学校におけるカウンセリング機能や教育相談体制の充実を図るために、今回の研修講座での学びをもとに、見直しを行い、今後の学校経営に役立てていきたいと感じました。

しており、家庭だけでなく、学校現場においても今まで以上に心や感情について学ぶ機会を増やす必要があると思いました。そのためには、大人が怒りの感情を否定せず、上手に表現できるように手助けすることが大事だと思います。また、保健室に何度でも来室する児童には、自分の感情をうまく言葉にできない場合が多いと感じています。日々の児童との関わりの中で、児童理解を深め、児童が自分の感情を表現できるよう、児童の心の成長をサポートしていきたいと思っています。

令和5年度第48回 全国教育大会北海道大会

一関市立摺沢幼稚園 芦宏園長の提言

「学びに向かう力」を育む幼小接続―

11月11日（土）に、札幌市において「第48回全国教育大会北海道大会」が開催される。

大会主題である「自分のよさや可能性を認識し他者を尊敬する教育」に関する先進的で特色ある教育実践について各園、各校種、家庭・地域社会が提言を行う。

一堂に揃って提言を行うのは、公益社団法人日本教育会の一環の特色であり、児童・生徒の発達段階への理解を深めるとともに、教育の充実につながる視点や取り組みについて学ぶ機会となっている。

幼稚園・こども園の領域では、一関市立摺沢幼稚園長の芦宏氏が「学びに向かう力を育む幼小接続」意欲的に遊びに向かう幼児の姿を通して「」について提言を行う。園内での幼児同士の関わりを大事しながら「学びに向かう力」が育

まれる手立てや教育環境の整理等についての事例や園外との関わりとして、幼小の接続の在り方について提言を行う。

令和元年度に開催された第44回全国教育大会愛媛大会において、花巻市立花巻幼稚園が「育ちと学びをつなぐ保育をめざして」テーマでの評価を指導に生かす園内研究の工夫と改善」について提言を行った。その中でも、隣接する小学校との合同事例研究の継続は、共通の視点で幼児の育ちや学びについて幼小相互の課題を共有できる有意義な機会と紹介していた。

2つの提言は「学びの連続性」を大事にしており、芦氏は、岩手県国公立幼稚園・こども園協議会会長でもあることから、当日は、岩手県内の幼稚園・こども園で健やかに育っている幼児や温かい目で指導・支援している教職員の様子なども紹介されるものと思われる。岩手の代表として思いのこもった提言となる。

日本教育会令和5年度全国教育大会 北海道大会の日程及び岩手県支部の参加状況

●大会日程

- (1) 開会式 12時50分
- (2) 趣旨説明・提言 13時10分
 - ① 幼稚園 岩手県一関市立摺沢幼稚園長 芦 宏氏
 - ② 小学校 北海道奥尻町青苗小学校校長 工藤 崇氏
 - ③ 中学校 宮崎県西都市立妻中学校校長 伊東 泰彦氏
 - ④ 高等学校 大阪府立箕面東高等学校校長 佐藤 誠治氏
 - ⑤ 特別支援学校 愛知県立大府もちのき特別支援学校 桃花 校舎 部主事 河合健太郎氏
 - ⑥ 家庭・地域社会 熊本県NPO法人「NPO」なんかん ゼネラルマネジャー 山田健次氏
- (3) 記念講演 15時
演題「AIと共に創る教育の未来」
講師 東京大学次世代知能科学センター 教授 松原 仁氏
- (4) 閉会式 16時30分

●参加状況

今年度は、一関市立摺沢幼稚園の芦宏園長先生が幼稚園の部で、「学びに向かう力を育む幼小接続」と題して提言をすることもあり、各地区会をとおして、広く会員の皆様にオンラインでの参加をお願いした。

また、昨年度に引き続き主幹教諭研修派遣事業をこの北海道大会に位置付け、新任で正会員の主幹教諭の先生方に参加を呼びかけた。盛岡地区会の本田岳雄会長、北上市立黒沢尻幼稚園の山本ゆかり園長には、札幌市会場に直接ご参加をいただくことになっている。

開催日が11月上旬で諸行事と重なる学校が多く、希望される先生方はそれほど多くはないが、地区会役員、支部事務局合わせて十数名がオンライン参加の予定である。

地区会だより

胆沢地区会

4年ぶりの総会・親睦会を開催

7月22日(土)、水沢グランドホテルにおいて、4年ぶりに総会並びに親睦会を開催しました。

総会では、県南教育事務所の佐藤孝之所長をはじめ、奥州市教育委員会高橋勝教育長、金ヶ崎町教育委員会千葉和仁教育長の3名のご来賓に出席いただき、67名の会員の参加のもと、令和5年度活動計画、予算案等を協議し、承認いただきました。



総会の様子

ような講演会を希望するかの調査を行い、次年度から再開することとしました。本地区の歴史を振り返ることや著名人の方の話を聞くことなど意見が出されましたので、このご意見を参考にし、次年度の講演内容を考えて進めて参ります。

親睦会では、積極的な情報交換が行われておりました。終身会員の皆様と現職会員が接する機会が実に4年ぶりということ、当時の学校の話から現在の仕事、趣味の話など多くの話題にふれていただき、2時間があっという間に過ぎてしまったという印象です。改めて親睦の場の大切さを参加者全員が感じる、有意義な時間を過ごすことができました。

(事務局長 佐藤 克洋)

宮古地区会

4年ぶりの総会の開催

7月25日(火)、宮古市教育研究所にて、学期末にもかかわらず

48名の会員の参加のもと、4年ぶりの宮古地区会定期総会を開催することができました。

総会では、青笹光一会長のあいさつの中で、新型コロナウイルス感染症が5類になったとはいえ、学校現場では対応に苦慮しながらも学校運営の充実に尽力し、一学期を終えられることに対して現職の教員への労いの言葉がありました。また、交流の場を令和2年度からの3年間もてなかつたことから、今年度はぜひ、4年ぶりの講演会と交流会を開催し、宮古地区会の活動を充実させていきたいという思いを話されました。

協議では、講演会と交流会の日程や宮古地区で開催される研修会、研究大会への支援等の計画について事務局より提案し、承認されました。また、今年度の講演会は1月末から2月初旬に予定しているものの、インフルエンザの流行等を考慮し、確実な開催と多くの方が参加しやすいように、次年度以降は時期をずらして開催する見直しがあることを伝えました。総会の最後には、多くの活動を

休止していた地区会を会員全員で盛り上げていくことを確認し、温かな拍手の中で閉会しました。

(事務局長 今西 顕隆)

二戸地区会

4年ぶりの研修会開催

8月3日(木)、二戸市シビックセンターにおいて、二戸地区会研修会を4年ぶりに開催しました。

開会行事では、県北教育事務所長石亀健様、二戸市教育委員会教育長加藤暢之様からご祝辞をいただきました。研修会では、ご来賓4名、会員78名の参加のもと、軽米町長の山本賢一氏をお迎えし、「地域資源・地域エネルギーで持続可能なまちづくり」と題して、ご講演をいただきました。



はじめに、軽米町が今から23年前の豪雨で大変な被害に遭い、そこから復興したと、町の財産は町の人々で「人づ

岩手県中学校長会 会長
理事 **中屋 豊氏**
(盛岡市立厨川中学校 校長)

スポット その181

中屋豊校長先生は、令和3年4月第27代校長として本校に着任されました。生徒たちは74年の伝統を継承し新たな飛躍を誓って今年度「耀咲（かがやき）」をスローガンに掲げました。今まさに輝き咲き誇ろうとする生徒たちとそれを支える職員の頑張りを決して見逃すことなく温かい励ましと労いの言葉を掛けて下さい



今年度の学校経営方針について生徒たちには「学び」があり、職員は「価値」を見出して働くことができ、保護者や地域の方々からは「通わせたい」と期待を寄せてもらえる学校でありたいと話していました。その言葉どおりに、生徒保護者、職員、それぞれの声に耳を傾け、細やかな心配りを欠かすことはありません。今年度は、岩手県中学校長会長という重責も担われ、更に多忙な毎日をごさされていますが、いつも笑顔で私たちを迎え入れて下さいます。今日も校長室の扉は開かれています。

(副校長 菅生 賢一)

そして、町の資源を100パーセント生かしていくことから、軽米町の恵まれた日照時間を活用する太陽光発電、町の産業「プロイラーの鶏ふん」を活用する鶏ふん発電、風力発電について話され



講演をする山本軽米町長

くり」が大切なことでした。話されました。

ました。六ヶ所村に並ぶ発電量ということに驚きました。広い視野のもと、世界の地球温暖化問題や軽米町の過去・現在・未来を熱心に語る町長さんに感銘を受けました。私たちも今まで以上に熱意を



熱心に講演を聞く会員の皆様

一 関東地区会

もって教育に打ち込みたいと気持ちを新たにしました。
ご参加くださった皆様は、笑顔で会場を後にしました。
(事務局長 芳賀 かつえ)

4年ぶりの総会・研修会・懇親会開催

8月7日(月)、サンプラザ及善別邸「ザ・エスプリ」において、4年ぶりに総会・研修会並びに懇親会を開催しました。

総会では52名の地区会員の参加のもと、令和5年度の地区活動計画、予算案等を協議し承認いただきました。

引き続き行った研修会では、地産地消アマチュア講師として一

関を中心に活躍中の「地伏亭金目」氏を講師に招き、2つの高座演目で講演いただきました。一つの演目は、源義経の愛馬として源平合戦で活躍した千厩町が産地とされている「名馬太夫黒」。



総会 会長あいさつ



研修会の様子

セールスマン」と題し、宮沢賢治が晩年に技師を務めていた旧東北採石工場(東山)で、農民のため土壌改良材の生産に尽力していた当時の様子を、軽快でダイナミックなリズムで講談いただき、参加した会員たちを惹きつけました。その後、行われた懇親会では、新会員の紹介も交えながら、現職会員と終身会員ともに杯を交わしながら親交を深めました。4年ぶりに実施した参加型の総会・研修会、そして懇親会。参加された方々のたくさんの笑顔から、改めて顔と顔の見える関係作りの大切さを感じるとともに、一関東地区会員の結束をさらに強める会となりました。

(事務局長 佐藤 弘幸)

人との絆忘れずに学ぶ我らの輝く瞳

大船渡市立赤崎小学校 校長 高室 敬



平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波で、赤崎小学校は校舎2階まで浸水、体育館も2階ギャラリイまで浸水しました。平成24年4月には、蛸ノ浦小学校校舎で授業を再開し、被災した校舎の取り壊しが始まりました。校舎裏の山林を造成し、木造と鉄筋コンクリート造の混構造による、快適で安全な新校舎が高台に建てられました。そして、平成29年4月、赤崎小学校、蛸ノ浦小学校の二校が統合し、新生「赤崎小学校」が誕生しました。

「潮風かおる この丘に

明るい光 差してくる」

赤崎地区・蛸ノ浦地区小学校統合協議会が作詞作曲した新校歌の歌い出しにあるように、爽やかな潮風を受け、全校児童107名が、明るい笑顔を見せながら学習を進めています。



【手を握りながら優しく語りかけます】

互いに支え合いながら、新たな歴史を刻んでいる本校の総合的な学習の時間には、深い心の交流が生まれる「高齢者とふれ合おう」という学習が位置付けられています。

まず、グループホーム「後ノ入」所長の河原昭洋さんと、大船渡地区「認知症の人と家族の会」のみなさんから、認知症の方々との

ように接していけばよいのかについて教えていただきます。認知症

の方になり切った家族の会のみなさんとのやり取りを通して、どのような受け答えがいいのかをみんなで考えていきます。訪問では、

おばあさんやおじいさんと自由に会話をする時間を設けます。「私の名前は～です。」「どこの小学校を卒業したんですか。」など、子どもたちは学んだことを生かしながら、優しく語りかけていきます。

姿勢を低くして、おばあさんの手をしっかりと握り、耳のそばで聞こえるように話す子どもたちの姿に、涙を浮かべる方もいらつやいます。昔のことははっきりと覚えていいるおじいさんやおばあさんに合わせ、肩もみをしながら時間を忘れて会話を楽しんでいきます。

「人との絆 忘れずに

学ぶ我らの 輝く瞳」

新校歌の3番に込められた赤崎地区・蛸ノ浦地区の皆さんの思いが、子どもたちの姿となつてはつきり見える瞬間です。

地域に学び活力を吹き込む、新生「赤崎小学校」の子どもたちです。

山寺の鐘

報道によると、今年の7月は地球の平均気温が観測史上最も高かったそうだ。

続く8月、岩手も例外ではなく連日35度前後の猛暑、エアコンが手放せない状態だった▼そのような中、夏休みを利用し、涼を求めて仲間5人で岩手山に登った。期待通り、山頂付近は下界と違い上着がないと寒いくらいだった▼平日とあって登山者は少なめだったが、やはり目立つのは中高年の方たち。その中に夏休み中の小学生と思しき子どももいた。大人がヒーヒー言っているのに、その子の軽やかな足取りには一同感嘆した▼疲れた疲れたと連呼しながら登っていると、後ろから年配の女性に「あまり休まないでゆつくり登るのさ」と声をかけられ、追い越された。その方にはとうとう最後まで追い付くことはなかった▼少子高齢社会だとか人口減少社会だとかマイナ斯的に言われることが多いが、どっこい岩手の老年層も年少層も元氣だ。我々生産年齢層も頑張らねば、と思った。

(盛岡市立見前中学校

校長 藤村 健二)